

# 新しい資料の解読によるフレーベル「教育遊具」 の体系的考察

資料批判と今日的課題

小笠原 道 雄

A Study of the Systematization on Friedrich Fröbel's  
Educational Toys (Spiel-und Beschäftigungsmitteln)  
:Examining its Unpublished Material (Nachlass)

Michio OGASAWARA

**Key Words** : フリードリヒ・フレーベル Friedrich Fröbel, 教育遊具 Educational Toys (Spiel-und Beschäftigungsmittel),  
未刊行資料 Unpublished Material (Nachlass)

## 問 題 提 起

Fr. フレーベル研究の領域で、特に、中核的なかつ実践的な活動として「教育遊具（遊具・作業具を含む）」があるが、今日、未刊行資料（遺稿）の解読が進捗し、その資料解読によるフレーベル「教育遊具」の体系的な見直し、あるいは、再審が世界的な規模で必須のものとなっている。本稿は、1998年以降、ドイツのフレーベル研究者と共同で遂行してきたフレーベルの未刊行資料の収集、整理、「Findbuch（目録）」の作成が2007年に完了し（研究代表者 小笠原道雄、研究成果報告書：『フレーベルの未刊行資料（遺稿）に関する研究調査とその目録の作成』平成17年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究 C）、平成19年4月、（放送大学））、その資料の具体的な解読、解釈による新たな、あるいは、「正しい」フレーベル「教育遊具」の体系的な研究を図るものである。

フレーベル『教育遊具』に関する研究が世界的規模で今日に至るまで固定的解釈が流布した背景として、「教育遊具」に関するオリジナル資料がフレーベルの没後、分散して保存あるいは所有され、全体的なかつ体系的な考察が不可能であったこと等があげられる。それが、ドイツ統一後初めて、ベルリンの「陶冶史研究

図書館（BBF と略称）」保存の BN 遺稿（これは主に旧東ドイツ教育科学アカデミーが所有していたもの）、並びに「ベルリン国立図書館」のプロイセン文化財団所有「フレーベル遺稿（これは旧カイルハウ遺稿（KN と略称）」とパートブランケンブルクの「フレーベル博物館」（BIM 遺稿）の三カ所にほぼ集約的に保存されたのである。従って1990年のドイツ統一は、フレーベル遺稿に関してもその保存場所の変更を含めて劇的に変化したのである。かくて、フレーベルの「教育遊具」に関しても、相互の関連を必要とする全体的な比較考察、分析、解釈がドイツ本国でもようやく2000年代に入ってから可能になった。中でも、未刊行資料中、「書簡」については、H. ハイラント（Heiland）博士を中心とするドゥイスブルク大学フレーベル研究所が、2006年5巻の CD-R で完成させ、公開された。未刊行資料の「Findbuch（目録）」の作成は、ドイツ側から K. ノイマン（Neumann（現ドイツ・フレーベル学会会長））、日本側から小笠原が担当、上記の通り2007年に完成した。なお、本「Findbuch（目録）」の作成過程で論者は、ベルリン陶冶史図書館の地下保存所に保管されている30個程度の「箱」（一般には Mappe（鞆）といわれる）を直接地下保存所で長時間、入念な遺稿の調査や収集を行う機会をえた。従って、本稿は、こ

の「書簡」, 「Findbuch (目録)」の中から, 具体的に, フレーベル「教育遊具 (遊具・作業具を含む)」に関する資料を対象に考察 (解説・分析・解釈) をおこない, その全体像の解明を図るものである (ただし, 今回の考察では, すでに, 解説され, 刊行された文献等も吟味し, 特に, 今日の課題に論点を焦点化してフレーベル「教育遊具」の問題提起をおこないたい)。

## 本 論

### 1 資料に関する考察:

今回論究の対象となるフレーベルの「教育遊具」に関する資料は, 論者が作成した「Findbuch (目録)」では, 以下のものである (数字は目録番号。[ ] 内番号はベルリン陶冶史研究図書館 (BBF) の「箱」(Mappe) に付されている番号)。1.2. 遊具-並びに作業具に関する解説, 評論 (Kommentaren zu den Spiel- und Beschäftigungsmitteln [54])。

1.2.1. 一般的な作業, 歌並びに運動遊戯 (Allgemeine Uebersichten, Lieder und Bewegungsspiel) [55~68]。1.2.2. 母の歌と愛撫の歌 (Mutter- und Kose- lieder) [69~73]。1.2.3. 第一恩物 (Erste Gabe) [77~84]。1.2.4. 第二恩物 (Zweite Gabe) [85~91]。1.2.5. 第三恩物 (Dritte Gabe) [92~95]。1.2.6. 色々な遊具, 作業具および教材 (Verschiedene Spiel-, Beschäftigungs- und Unterrichtsmittel) [96~101]。

これら未刊行資料と並んで, 今回フレーベルの「教育遊具」を体系的に再審し, 考察するため, すでに刊行されている, ドイツ語文献も吟味してみた。先に示した未刊行資料の中から, 部分的に収録したものであるが, 重要な文献が刊行されていることが判明した。それらを年代順に挙げれば, (1) W. Lange 編纂『Friedrich Fröbels gesammelte pädagogischen Schriften, 1. Abteilung: 2 Bände, 2. Abteilung: 1 Band, Berlin (1862~63)』。周知のようにこの三巻の『教育学全集』はわが国では『フレーベル全集』全五巻 (1977~1981) として玉川大学出版部から翻訳出版されている。本編纂書がフレーベル教育学研究の基本的文献であることは不変であるが, 他方, オリジナル資料の取捨選択には, ハイラントが指摘するように, 「資料批判」の立場からは後世のフレーベル研究にとって多くの問題を抱え込むことになったのも事実である。

(2) E. Blochmann 編纂『Fröbels Theorie des Spiels I』(1931), (3) L. Klostermann 編纂『Fröbels Theorie des Spiels II』(1936), (4) E. Hoffmann 編纂

『Fröbels Theorie des Spiels III』(1936), そして, 1982年, フレーベル生誕二百年の記念の年に旧東西両ドイツからそれぞれ刊行された (5) E. Hoffmann 編『Friedrich Fröbel Ausgewählte Schriften, Vierter Band: Die Spielgabe』(1982), (6) R. Boldt/E. Knechtel/H. König 編纂『F. W. A. Fröbel』(1982), さらに, (7) H. Heiland 著『Die Spielpädagogik Friedrich Fröbels』である。これら編著のなかでも (2)~(4) は, 小冊子ながらすでに第二次大戦前の30年代に刊行されたものである。ただ注意しておきたいのは, 資料批判的にいえば, 30年代ドイツ, つまり, ヒットラー政権時代にフレーベル遊戯, とくにフレーベルの集団遊戯が身体運動とともに, ドイツ民族の高揚手段として注目されたことも事実である (1936年ベルリン・オリンピック大会を想起されたい)。また, 資料 (5)~(6) に関していえば, フレーベル生誕二百年の記念のために編纂されたもので, いずれも, 先の三カ所に集約される以前の資料から「教育遊具」に関する部分を, 編纂者の関心から取捨選択して編集している。特に, 旧東ドイツの場合, 多くの刊行物が生誕 (ないしは没後) 記念特集というスタイルで編纂・刊行されることが多いが, 本フレーベル選集も, 記念祭に先立つ四年前の1978年「東ドイツ第8回教育会議は, フレーベルを東ドイツがその遺産を守っている進歩的な市民的教育学者の列に加えた。(略) 自由で全面的で調和的な人間陶冶というフレーベルの理想は, 共産主義教育の目標と内容のなかで弁証法的に止揚されている」(R. ボルト/W. アイヒラー, 小笠原訳『フレーベル 生涯と活動』, 163頁) という「精神」で資料の編輯がなされ, 刊行されているのである。それに対して, (7) の H. ハイラントの『Die Spielpädagogik Friedrich Fröbels』は, I. 「フレーベルによって刊行されたフレーベルの遊戯教育学」, II. W. ランゲ (Lange) から現在迄 (1982) に編纂された「遊戯教育学」, III. 「フレーベルの未刊行の書簡にみられる遊戯教育学の命題」から構成され, その徹底的な資料批判を通じて「真性な (authentisch)」フレーベルの遊戯教育学を提示しようとしている。

さて, フレーベルの「教育遊具」に対する従来からの理解では, (1) 対象となる遊戯手段として, (a) 立体として, 第一恩物から第六恩物, (b) 平面 (厚紙製の張り紙板, 色付き正方形の紙 (折り紙)), (c) 直線 (木片, 樹の棒, 糸等), (d) 点 (石, 真珠, 種子と果

実、砂粒等)のみが「遊具」として考えられていたが、未刊行資料の「Findbuch (目録)」からは、(2)「作業具」、そして、(3)「運動遊具」が子どもの発達に即して連結しながら、考案され構想されたようである。改めて、フレーベルの構想する「恩物」(「拡張第二遊具」、第二系列遊具)を含む)の再吟味をおこないながら、特に、「作業具」と「遊具(恩物)」\*の差異、さらには、「運動遊具」の考察によってフレーベルの『教具』に対する基本的な考えをおさえる必要のあること、その上で、フレーベル「教育遊具」の全体像をあきらかにすることが今日の課題と思われる。

## 2 フレーベルの「教育遊具」の体系的考察

1) フレーベル「教育遊具」を再考するためには、その前提としてフレーベル遊具の伝達に「誤り」があることに注意をする必要がある。その具体的一例として、すでに、荘司泰弘による1996年の第1回日独フレーベル会議の報告「日本におけるフレーベル遊具伝達の誤り」に窺われるように、それは全世界的傾向であり、また、日本の場合、文化的背景を異にすることから、さらには、伝達的手段(言葉)の難点からその伝達の「誤り」は大きなものがあった(荘司泰弘論「日本へのフレーベル遊具伝達の誤り」、日本ベスタロッター・フレーベル学会紀要『人間教育の探究』第9号(1996)所収。『荘司泰弘によるフレーベルの遊具展』パンフレット(1992年8月27日～9月2日)参照。尚、荘司泰弘が利用した多くの文献は旧東ドイツの教育科学アカデミー(ベルリン)とバート・ブランケンブルクのフレーベル博物館のものである)。具体的に説明すれば、荘司泰弘が指摘するように日本では、フレーベル教育遊具は、第一遊具：ボール(毬)、第二遊具：回転する球体・円柱体・立法体、第三から第六遊具：積み木、第七遊具：色板、第八遊具：金冠、第九遊具：色棒、第十遊具：貝殻、として紹介されてきたのである。結論的には、第一から第六遊具をフレーベルは「恩物」として作成していたのである。(フレーベルは第一から第十遊具を「遊具(Spielgabe)」と呼

んだが、第七から第十までは構想の段階で未完成であるのに、わが国では、否、世界中で「作業具(Beschäftigungsmittel)」のそれと混同して(誤って)伝達されたのである。驚くことに、1876年、関信三によって東京女子師範学校付属幼稚園に「教育遊具」が導入されて以来、1980年代末まで、わが国では上記の点が誤って紹介され、そのように理解され、使用されてきたのである。従って、この「誤り」は確実に修正されなければならないものである。)

2) 次に、今回のテーマ：「フレーベル教育遊具(「遊具」と「作業具」を含む)の体系化」を図る場合、フレーベル「教育遊具」の全体像を「新しい資料」に基づき、いかに構想するかが重要である。一応ここではE.ホフマン(Hoffmann)によって示唆された「遊具(恩物)体系」(vgl.; Friedrich Fröbel ausgewählte Schriften Vierter Band; Die Spielgaben (Hrsg.) s. 237ff.)を参照して論者が「フレーベルの発達の・教育的遊具の体系」として構想したものに、今回新たに獲得した知見、とくに、荘司泰弘のフレーベルの遺稿を中心とする「教育遊具」に関する研究を参照にしながらその修正をはかり、「正しい」フレーベル「教育遊具」の体系化をはかる(図1「フレーベルの発達の・教育的遊具(恩物)体系」参照、小笠原道雄著『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1994年所収、244頁を修正する。荘司泰弘論「フリードリッヒ・フレーベルの教育遊具の研究(その1)」日本ベスタロッター・フレーベル学会紀要『人間教育の研究』第5号、1992、荘司泰弘論『フレーベル教育遊具の研究』(学位論文の要旨)1998を参照)。

(1) フレーベルの教育遊具(遊具と作業具を含む)の基本的な考え方 なぜ、「教育遊具」が必要なのか。

a) 基本的にこの「問い」にたいしては、フレーベルの教育観がまさにそれを表現しているといえる。例えば、「教育」にとって第一に問題なのは、子どもとしての人間に、形成のためにふさわしい素材を与えることでなければならない」との記述。あるいは「教育の第一歩は、子どもに自分の心に描いていることを表現するために適切な素材を与えることでなければならない」と述べるフレーベルの教育観である。

1832年、フレーベルはその日記で、教育遊具が今、なぜに特別な関心を惹くのかについてかなり確信的な説明をしている。「精神的なものの記述」は、「身体的空間的なものに結びつかなくてはならない」(ランゲ版、

\* フレーベルの場合、「遊具(Spielgabe)」という名称を使用する時は、子どもに「外部世界」の情報を「内部世界」に取り込む、すなわち、情報の「内面化」をうながすものであり、それに対して「作業具(Beschäftigungsmittel)」は、子どもの「内部世界」のイメージを「外部世界」に表現する、つまり、精神的「外化」をうながす「素材」を考えている。

I. 379頁) という『人間の教育』において論述された思想に依拠しながら、「精神は、自己を自己記述を通して自己認識へと高めるために必然的に「素材」を必要とする」というのである。この『人間の教育』に述べられた思想が具体的に展開されるのは、「遊戯」と「活動箱」に付された「テキスト」の中に書きつけられ資料においてである(1838年のボールに関するパンフレット等)。それに続くのが、1838年に31号が、1840年に21号が刊行された『同志への日曜新聞(Sonntagsblatt)』である。このテキストと論文のなかで、フレーベルは、読者に彼の遊戯と遊具についてその意味と使用法を具体的に伝えたのである。このようにしてフレーベルの就学前教育の核をなす「遊戯の理論」が出現した。従って、フレーベルの「遊戯の理論」の端緒は、1826年の主著『人間の教育』にはじまり、1838年前後からそれが具体化するのである。

b) フレーベルの「教育遊具」(「教具」)は、基本的に彼の「球体法則」<sup>(註1)</sup>の理論と「媒介の法則」<sup>(註2)</sup>の理論を基底にして、あるいは背景にしてその体系化

<sup>(註1)</sup> 「球体法則」とは、1811年に、フレーベルが自己の学問(哲学と科学)の命題として総括したものである(vgl., A. Rinke; Friedrich Fröbels philosophische Entwicklung unter dem Einfluss der Romantik, 1935, 117 (Tbl. 2.8. 1881, I, 112a-b))。その命題とは、(1) 全宇宙を通じて、ただ一つの原理のみが支配している。(2) この法則は、プラスとマイナスの法則、あるいは対立の法則である。(3) この法則は、中心からあらゆる方向へと同時に出現し、あるいは、球体的に出現する。(4) 存在する万物は、球体的である。(5) 全宇宙は、球体的である。(6) 永遠の創造者の座は…その中心に(ある)。さらに、宇宙、学問、人間の存在、結婚生活、男性と女性等を含む24の命題が記述されている。ただ、わが国におけるフレーベル研究では、A. リンケ(Rinke)の研究論文が刊行され、その中でフレーベルの日記草稿が写真版で掲載されているにもかかわらず全く注目されなかった。ようやく、1982年の生誕二百年祭に刊行された記念刊行物等からその重要性が認識された。

H. ハイラント著、小笠原/藤川訳『フレーベル入門』1991年、74~78頁、玉川大学出版部、小笠原道雄著『フレーベルとその時代』1994年、114~133頁、玉川大学出版部等を参照のこと。

<sup>(註2)</sup> 「媒介の法則」; フレーベルによればこの「媒介の法則」もまた本質的な法則として人間精神の中に宿っているものである。すなわち、「万物における根本法則であり、見える世界と見えざる世界、精神的

が図られていることである。

「球体法則」と「媒介の法則」、さらに「生命合一の法則」(1831)もあるが、これは「球体法則」のバリエーションであると同時に、フレーベル教育学の基礎理論でもある。リンケは、フレーベルの1821年10月13日の日記を引用して「球体法則」を「三位一体の法則」に展開して論じている(A. Rinke; Das Gesetz der Trinität, Tagebuchblätter 1821. 10. 23. Mapped XI, 116a~120a)。具体的には、(1) 「球体法則」からは、フレーベルは「遊戯」と「作業」手段を「分析」と「総合」という構造連関のなかへと持ち込んでいるのである(ランゲ版、II. 559頁以下)。(2) 「媒介の法則」からは、本質的な法則として人間精神の中に宿っているもので、教育的には、人間の成長・発達段階を考慮して構成されている(ランゲ版II. 337頁)。より具体的には、制度としては「媒介学校ないしは接続学校(キンダーシュレール)」等が指摘されよう。

c) フレーベル教育遊具の体系(8頁 図1参照) フレーベル教育遊具の体系は、上記の「球体法則」と「媒介の法則」を結合させながら構成されている。

構成の土台(出発点)は、以下の通りである(時計文字I, II, IIIの順序で説明)。

I 母の歌と愛撫の歌(Mutter-und Koselieder. Dichtung und Bilder zur edlen Pflege des Kindheitslebens, 1844)である。

一般に、家庭育児書といわれる本書の詳細な全タイトルから本書の精神的な基本線が予感される。すなわち、「さあ、子どもたちに生きようではないか!母の歌と愛撫の歌、および身体と四肢と感覚の遊戯のための歌。子どもの生活の早期保護と自己保護のために。フリードリヒ・フレーベルによる家庭育児書」。フレーベル自身、本書の精神(課題)を『母の歌と愛撫の歌』への「指示」の中で以下のように示している。「私はこの書の中に、私の教育法の最も重要なものを示した。それは自然に即した教育の出発点である。なぜならそれらは、人間の素質の萌芽が健全に、そして完全に発達すべき場合には、いかに育てられ支えられな

世界と肉体的な世界における根本法則である」。教育的には、発達に即して教育するところの人間陶冶の根本法則として認知され、主張されるものである。小笠原道雄論「フレーベルにおける人間形成の基底論理」、小笠原道雄他編著『人間形成の哲学』、1992年、大阪書籍、303~318頁参照。

ればならないかという方法を示しているからである」(Friedrich Fröbels Mutter = und Kose = Lieder von Dr. Johannes Prüfer, 4. Auflage 1927, I (J. プリュウファアの「あとがき」「この本を生みだした精神」より)。また同様の課題を M. シュミット (Schmidt) 宛の書簡の中でも述べている。「子どもの身体、四肢および感覚活動の使用を助けるのみではなく、のちになってそれらを十全に意識するのを助け、さらには母親やその代理人をして、こうした子どもの保育やその高次の意義や究極的な連関を意識させるために、私は生活そのものから現れた若干の可愛らしい詩と遊戯をすべての幼児の身体、四肢および感覚遊戯の Koseliedchen と名づけて、心にとめました」(C. Lück (hrsg.) Friedrich Fröbel und die Muhme Schmidt, 1929, s. 86) (なお、本書の成立や構成については小笠原道雄論「未刊行資料の解説によるフレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の成立に関する考察」、『広島文化短期大学紀要』, 第41号 (2008), 1~12頁参照のこと)。本書の刊行とともに同年、R. コール (Kohl) 作曲によるルドールシュタット近郊ブランケンブルクの幼稚園でのボール遊びのための二声部からなる「百の歌」の刊行も重要である(“Kommt, lasst uns unsern Kinder leben!” 100 Lieder zu den in dem Kindergarten zu Blankenburg bei Rudolstadt ausgeführten Spielen mit dem Ball; zweistimmig in Musik gesetzt von Robert Kohl)。なお、今回の調査でそのオリジナル原稿(資料)を「フレーベル博物館」で写真にて収録した。その内、(1)『ボール遊びのための百の歌』の初版版表紙(1844)、(2)『百の歌』のタイトルページ、(3)『百の歌』の「初めの歌」を資料として添付)。

## II 対象となる遊戯手段(教育遊具)

フレーベルの「教育遊具」は、第一に、子どもの成長・発達を考慮して考案されており、具体的には(1)家庭における「教育遊具」、(2)キンダーガルテン(幼稚園)における「教育遊具」、(3)媒介学校(キンダー・シューレ)における「教育遊具」、(4)基礎学校における「教育遊具」に区分される。この観点から、フレーベルの「媒介の法則」が基礎となっている。

第二は、フレーベル教育遊具は基本的な形式(形)を保持している。すなわち、フレーベルは、教育遊具を基本的な形として四つのグループに区分している。そしてそれぞれに生活形式、美的形式、認識形式を示している。これには、フレーベルの「球体の法則」が

基礎理論となっている。これら二つの思考を基礎にフレーベルの教育遊具は構成され、展開されている。以下、具体的に説明する。

- ・第一グループ 立体的遊具(恩物): フレーベル遊具の基本的要素の特徴を示す(単純-複雑。静-動)。

### 家庭における遊具

第一遊具(恩物)・ボール

第二遊具(恩物)・球と円柱・立方体

### キンダーガルテン(幼稚園)の遊具

第三恩物 立方体のさまざまな分割からなる

第四恩物 直方体の様々な分割からなる

- \* 童謡がつけられている。子どもは喜んで歌を歌いながら、しかも知的な能力をのばすことができる。

第五恩物 半立方体、立方体の様々な分割からなる

第六恩物 半立方体

- \* 40の石版画が付され多種多様な形を作るヒントが示されている。

### 媒介学校の遊具

拡張第二遊具(14の立体)

第二系列遊具(話す立方体)

基礎学校の遊具(以下、第七恩物から第十恩物まで部分的に構想、計画されていたがまだ作られていなかった。)

第七恩物(錐体)(図2)

第八恩物(三角柱体)(図3)

第九恩物(正方形からできる面)(図4)

第十恩物(長方形からできる面)(図5)

- \* この基礎学校における「教育遊具」、すなわち、第七恩物から第十恩物の復元に成功した荘司泰弘の論文から、その図を転用する。なお、荘司の使用した文献は当時東ドイツ教育科学アカデミー保存の遺稿で、現在は、BBF 保管の Nachlass Friedrich Fröbel 57 である。表題は、「いまよりもさらに完成された Fr. フレーベルの遊戯箱と作業箱および作業の普遍的概要」(Allgemeine Uebersicht der bis jetzt zum grössten Teile ausgearbeiteten Spiel- und Beschäftigungskasten und-mittel von Fr. Fröbel) である。

- ・第二グループ 平面的遊戯手段: これらは板形からより詳細には正方形、不等辺三角形と正三角形

から出発する。全部で12の形となる。これには紙の正三角形も属する。\*1850年「折り紙の手引書」。

- ・第三グループ 線状遊具：木の棒，剥ぎ板，紙テープ，描かれた線。
- ・第四グループ 点状遊具：穴のあいた線，小石，種子，真珠，砂がもちいられる。

Ⅲ. 運動遊具：フレーベルの幼稚園構想では，本来的に，園芸，教具を用いた作業，そして運動遊戯からなっている。運動遊戯は，1837/38年のブルクドルフの孤児院における H. ランゲタール (Langenthal) の遊戯活動に遡るもので，1840年に『日曜新聞』で示した運動遊戯に繋がり，さらに，1844年に出版された「百のボールの歌」に接続するものであり，最終的にそれは，1851年頃の「ボールの歌」に結実する。

わが国におけるフレーベルの遊戯研究では，この運動遊戯・遊具については「恩物」の研究に比べ極端に少ないと言わざるをえない。集団による運動遊戯の面からの勝山吉章論「フレーベルの運動遊戯論に関する一考察」(1987)と H. L. クロステルマン，さらには F. ザイデルの論究に依拠しながら，教育思想の面から論究した山口文子論「F. フレーベルの運動遊戯にみられる教育思想」(1991)がそれである。今日，乳幼児期/幼児期/学童期における「身体運動」(リズム等を含め)の重要性は単に個としての身体の発達のみならず，グループでの遊戯を通じての社会性の発達の面からも重要視されている。特に，晩年，フレーベルが考案した，子どもたちが音楽に合わせて身体を動かし，集団で輪をつくり(「球体法則」)中心に向かいながら，そして再び拡大する運動遊戯等は注目される。これらは1840年，『日曜新聞』上に「運動遊戯」の表題で公表されるが，その後，その続編として1850年『フレーベルの週刊誌』に三度にわたり連載されている。それらを後にザイデルが Fröbel's Kindergarten (1883)に「より拡大した発達の・教育的遊戯」(Weitere entwickelnd = erziehenden Spiele)の表題で集約，掲載した(山口文子論「運動遊戯」，『ベスタロッチャー・フレーベル事典』，31頁参照)。

このように今日われわれは，ランゲタールに淵源する「運動遊戯」の系譜を辿りながら，「運動遊戯」を発展的に考察することが重要であり，それはフレーベル「教育遊具」研究の大きな課題である。ただし，すでに指摘したように，資料的には，1930年代に，ドイツでフレーベルの運動遊戯(特に，集団遊戯)が注目され

重視された点の吟味は，フレーベル思想とナチズム問題として教育思想史的には大きな問題を孕む点であることを再度確認しておきたい。今後の大きな研究課題としたい。

まとめに代えて：

フレーベル博物館の館長である M. ロックシュタイン (Rockstein) は博物館保存のオリジナル資料，さらには，その「遺稿」(Nachlass)の調査をすすめ，最近その「目録 (Findbuch)」を完成させたが，女史によれば，「教育遊具の全体像がわかり，しかも自分で新しい遊び方を考案できるようにしようとしたのがフレーベルの考えであった」(M. Rockstein, Kindergarten, 2004, s. 39)と結論づけている。「(フレーベルの「教育遊具」の)基本的な構造は定まっていますが，創意工夫の余地のある自由度の高いものだった」(ditto)と。このロックシュタインのフレーベルの「教育遊具」の本質を私たちはいかに受け止めたら良いのであろうか。明治期以来，日本では，フレーベル教育遊具のもつ「形式主義(象徴主義)」あるいは指導の「固定化，画一化」が強調され，大正期に入りそれが倉橋等によって問題視され批判されてきたのではないかと。確かに，フレーベル教育遊具(恩物)の持つ過度の「象徴主義」的強調はその神秘性を含めて再吟味しなければならない。しかしこれらの問題の背景には，すでに考察してきたように，フレーベルの「教育遊具」にたいする「誤解」が最大の要因ではなかったのではなからうか。つまり，その「正しい」資料の解読による「理解」(その使用法も含め)が全く不十分であった点に起因するのではなからうか。結論的には，外国の教育思想や教育理論，指導方法はもとより，具体的な『教育遊具』やその利用方法の「受容」にともなう「問題」が根本的問題として提起されよう。これに類する教育上の「誤れる受容」は，わが国の場合，枚挙にいとまがない程指摘されるのである。フレーベル「教育遊具」の「誤れる受容」，「誤解」は，その典型的な実例である。

最後に今後の研究課題を列記して拙論をとじる。

1. フレーベルの教育遊具体系の歴史的発展をその理念とその具体的実行(教育遊具の作成等)において明らかにすること。
2. 1841年から1842年にかけての教育遊具に関する未刊行資料を精査すること。
3. 「教育遊具」には，『歌』(「ボール遊びのための百の歌」等)や『身体運動』(歌いながら運動する)が結

合している、あるいは、互いに関連をもって構想されていること。それ故に多様な『教育遊具』の全体的考察が必要であること。

そして最後に、4. 幼稚園の思考と教育遊具の思考が一体化して構想され、展開されていること。それを念頭に「教育遊具」の全体を把握する必要があること。

(本研究は、平成21, 22, 23年度科学研究費補助金「基盤研究 (C)」 「未刊行資料の解説によるフレーベル

「教具」(「遊具」「作業具」を含む)の体系的研究」の交付による21年度中の研究成果の一部である。なお、本紀要の規定では、文献の引用表記に関して定めがあるが、拙論では、図表やオリジナル資料を利用した論究である点を考慮して、引用、参考文献は本文中に括弧 ( ) で挿入し、注記はアスタリスク ( \* ) を付して記述した。文中の図及び収集したオリジナル資料を文末に掲載した。)

### Summary

The purpose of this study is to make the systematize on Friedrich Fröbel's educational Toys (Spiel-und Beschäftigungsmitteln), especially, achived by reading and examining its unpublished material (Nachlass) (including 1) BN Nachlass of Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung in Berlin [BBF], 2) BIM Nachlass of Fröbel Museum in Bad Blankenburg, and 3) NK Nachlass of Prussian Culture Foundation in the manuscript section on Berlin State Library).

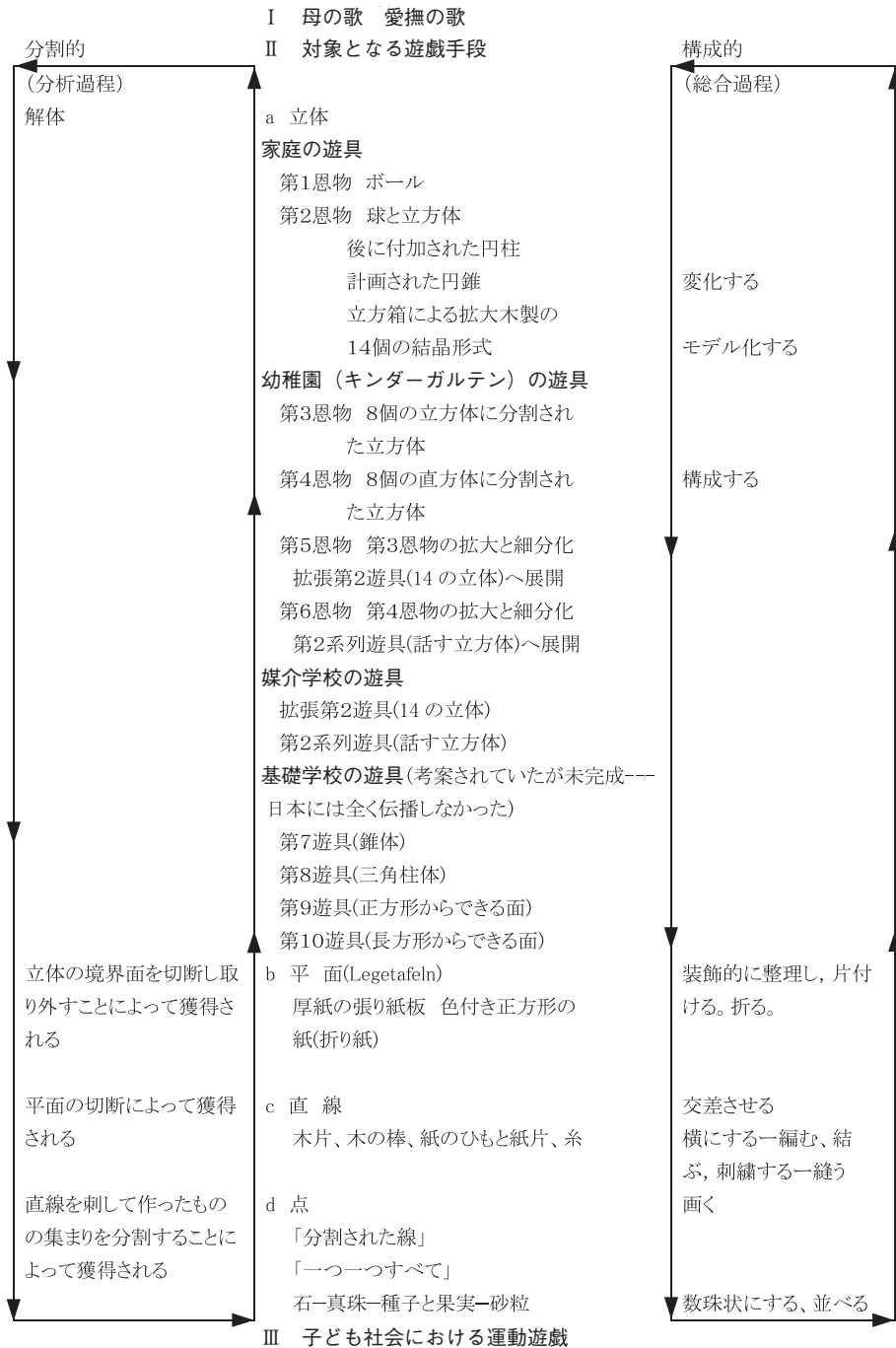


図1 フレーベルの発達の・教育的遊具(恩物)の体系



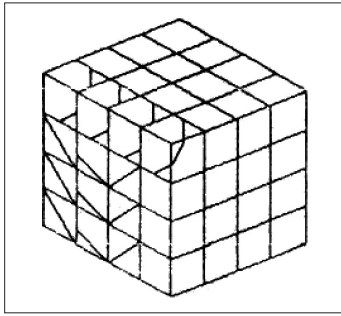


図2 第7遊具

第7遊具は、従来、フレーベルの色板であると誤って紹介されてきたものである。1844年頃の自筆の記録、「今よりもさらに完成されたフリードリヒ・フレーベルの遊具箱と作業箱の普遍的概要」によれば、「すべての面に従って3度に分割した部分立方体」と $1/2$ 、 $1/3$ 、 $1/4$ 、 $1/6$ に分割した部分立方体で構成されている（「荘司泰弘によるフレーベルの遊具展」1992年8月27日－9月2日パンフレット、5頁、引用）。

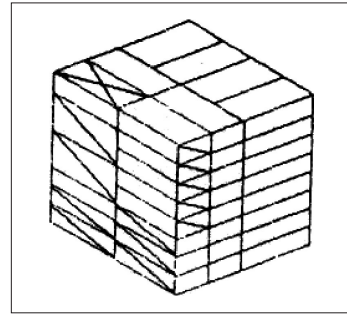


図3 第8遊具

第8遊具は第7遊具に関連して、主として8・12面柱体を提示。「普遍的概要」によれば、「64個の建築用割木に、15個を3種類の異なる仕方で半分に、1個を対角線によって4つに分割したものである（「荘司泰弘によるフレーベルの遊具展」1992年8月27日－9月2日パンフレット、6頁）。

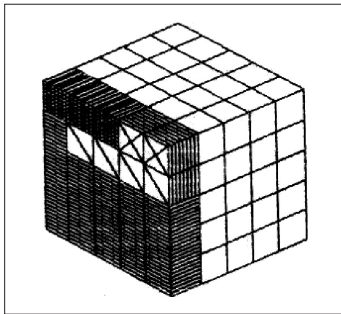


図4 第9遊具

第9遊具は立体と平面の中継ぎをする役目をもち、作業具（色板や色棒）の枚数を制限し、規定する役割を合わせもっている。純粹に形態のみ提示することを特色としている（「荘司泰弘によるフレーベルの遊具展」（1992年8月27日－9月2日パンフレット、6頁から引用）。

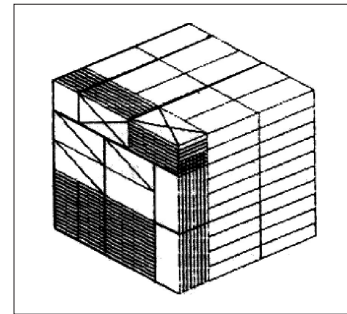
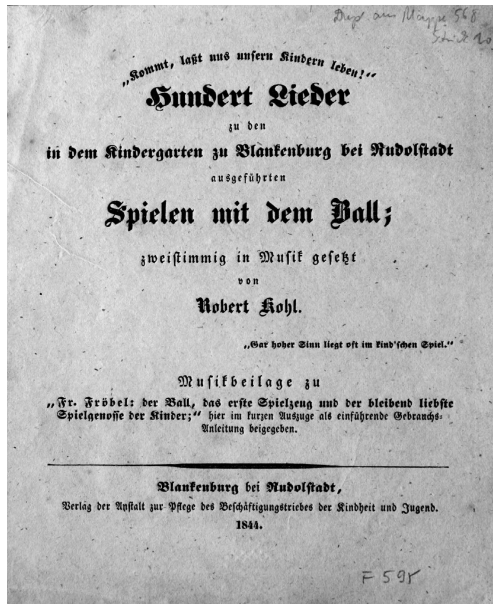


図5 第10遊具

第10遊具は第9遊具と同じく立体と平面の中継ぎをする役目を持ち、作業具（色板や色棒）の枚数や長さを制限し規定する役割を合わせもつ。ただし $1/4$ 長方形については作業具には採用されていない（同上「荘司泰弘によるフレーベルの遊具展」パンフレット、6頁参照）。

資料1 R. コールによるブランケンブルク幼稚園のための「ボール遊びの百の歌」初版版表紙



(実物大 21.5/17.5 cm)

資料3 「ボール遊びのための百の歌」の「初めの歌」楽譜

**Gingangs-Lieder.**

**Nr. 1.**

Nach süßler Nacht sind wir er wacht, sch'u froh den  
In süßer Ruh, Gott, stärktest Du von Neuem

Morgen wie der. Du, der uns schüßt, und giebst, was  
unsre Kräfte. Drum wollen wir sie üben

nüßt, Dir tönen unsre Lieber; Dir tönen  
hier, gibt Egen zum Geschäfte; gib Egen

unsre Lieber.  
zum Geschäfte.

1

(原寸 26.5/16.3 cm)

資料2 1844年「ボール遊びのための百の歌」のタイトル表紙



(原寸 21.5/17.5 cm)